

## ド・ゴールの住居

ブラザヴィル市の第2区であるバコンゴ (Baongo) に、La case de De Gaulle (「ドゴールの住居」と呼ばれる高い塀で囲まれた館がある。ド・ゴールとは、言うまでもなくフランス共和国 18 代大統領のシャルル・ド・ゴール (Charles André Joseph Pierre-Marie de Gaulle) のこと。その住居は住宅街が広がるバコンゴの奥まったコンゴ川の畔に建っている。周辺地域一帯は市内でも小高くなっているの、川辺からはコンゴ川全体を見下ろすことができ、たいへん景観の良い場所だ。対岸のキンシャサもよく見える上、少し川を遡ったところに広がっているブラザヴィルの中心地の全景を見渡すこともできる。ド・ゴールがこの住居をフランス政府に寄贈したことで、現在はコンゴのフ



La case de De Gaulle

ランス大使の公邸として使われている。

第二次世界大戦 (1939 ~ 1945 年) が勃発すると、フランスはドイツ軍の侵攻を防ぎ入れず、1940 年 5 月にはあえなく敗北を喫した。政権は抗戦派から和平派に交代し、ドイツに休戦を申し入れた。その結果、親ドイツの政権がフランスのほぼ中央に位置するヴィシー (Vichy) に置かれ、いわゆる「ヴィシー政権」が成立する。抗戦派のド・ゴールはイギリスに亡命、そこから「自由フランス」の名の下、ラジオ放送を通じてフランス国内にいる人たちに対し、徹底的な抵抗を呼びかけた。南フランスでは、共産党員が中心となって抵抗運動が展開、いわゆる「レジスタンス」として地下活動を続けた。

ド・ゴールはヴィシー政権に対抗すべく、フランスの「正当な」政治的権威を持つ機関として「フランス国民委員会」(Le Comité français de la Libération nationale (CFLN)) を設置し、自らがその代表に就任した。こうしてフランスは、二分されていったのである。

このフランスの動きと連動して、アフリカやアジアのフランス植民地でもヴィシー政権派と自由フランス派に二分されていく。アルジェリアやセネガル、マダガスカル、インドシナなどは親ドイツの政権を支持する一方で、サハラ以南のフランス領赤道アフリカ、南太平洋の植民地は、ド・ゴールを支持した。フランス植民地帝国もこうして二分されていくのであった。

このような状況下で、アフリカの植民地では同じ「フランス」同士のなかで交戦状態になっている。例えばド・ゴールの自由フランス軍は、イギリスの支援を取り付け、ヴィシー派が支配していたセネガルの首府ダカールを攻撃した。双方に激しい攻防が繰り広げられたが、「自由フランス」側が敗走した。

この自由フランス軍の約 65% が西アフリカ (主にセネガル) の徴集兵であったようだ。そのほかにも、アルジェリアやモロッコ、タヒチからの兵士からなる部隊も存在した。それは見方を変え、二分された「フランス」の双方の旗印の下で、現場ではアフリカ人同士が戦わなければならなかった状況だとも言

えるだろう。

フランスが敗北した 1940 年のドイツとの戦いでは、約 17,000 人のセネガル人が戦死している。第一次世界大戦ですでに多くの犠牲者を出したフランスでは、「白人」だけで戦うことは困難であり、セネガルを中心とした西アフリカからの徴集兵が不可欠だった。また、サハラ以南の黒人で編成される部隊も 25% に及んでいた。1942 年の末、アルジェリアのアルジェに「フランス国民解放委員会」が設けられると、こうしたアフリカ人から構成された部隊が次々と自由フランス側に集結するようになっていくのだった。

ド・ゴール率いる自由フランスにとって重要だったのが、活動の拠点となる「国土」だった。フランス本土はヴィシー政権の支配下にある。領土を持たない政権では、国際的サポートも得られにくい。そこで注目されたのがアフリカのフランス植民地であった。当時フランスの植民地の面積は 1,200 万 km<sup>2</sup> で人口は約 7 千万人 (入植者の白人 150 万を含む) になっていた。なかでも最もフランスに近いアルジェリアは戦略的に重要な拠点だったが、サブサハラ以南の植民地を集結させる拠点も必要であり、それがフランス領赤道アフリカの植民地政府が置かれていたブラザヴィルだった。国土を失った「フランス」は、植民地に依存することによって国際的顔面を保持することができたと言えるだろう。

植民地の重要性が認識されるなか、自由フランスの首都で開かれたのが、フランス植民地の歴史で重要な出来事の一つである「ブラザヴィル会議」(Conférence de Brazzaville) である。1944 年 2 月、フランス国民解放委員会の呼びかけで、ほとんどの植民地の代表が集まった。そしてこの会議で、現地人のさまざまな自由を制限していた「Code d'indigénat」(現地人身分制度) が廃止され、また現地の代表者をフランス本土の議会に送り込める権利などが認められた。

コンゴにド・ゴールの住居が存在した背景には、ヨーロッパの戦局のなかでアフリカの植民地が重要視され、そしてその中心がブラザヴィルだったということが考えられる。さらにそれがバコンゴだったことも、当時そこが植民地政府の中心地だったからだろう。ちなみにド・ゴールの住居の前に、ブラザの名を冠した灯台を建てられた (1952 年) が、今はその土台部分だけしか残っていない。

昨今、このブラザの灯台のすぐ横に大きな道が建設され、遙かに見下ろしていた首都の中心部に直接行けることになった。アフリカの多くの国でインフラ投資をしている中国が建設したものだ。またその反対のコンゴ川の下流へ向けて同じような道路も完成しつつある。かつては奥まったところにあったド・ゴールの住居は、今日、地理的にも歴史的にも単なる「通過点」となりつつある。



「ブラザ灯台」の土台部分